土木遺産への対応

岩越俊樹

中部地方整備局　天竜川上流河川事務所　駒ヶ根出張所（〒399-4117 長野県駒ヶ根市赤穂4538-5）

長野県上伊那郡中川村の天竜川右岸に存在する、歴史的土木遺産である『理兵衛堤防』について、中川村教育委員会等の関係機関と連携して発掘調査を行い、その内容を広報活動することによって、地元住民への防災意識の向上につないでいく活動を行った。

キーワード　村松理兵衛, 中川村教育委員会, 平成18年7月豪雨，広報活動

１．はじめに

長野県上伊那郡中川村の天竜川右岸において、平成18年7月豪雨により河床が洗掘され、土木遺産である『理兵衛堤防』の全貌が現れた。当事務所では、中川村教育委員会と発掘調査団を組織し、発掘調査ならびに広報活動を行った。本稿ではその方法と対応について、とりまとめた。

２．平成18年7月豪雨

⑴ 豪雨の概要

平成18年7月15日以降、梅雨前線は本州付近に停滞し南からの暖かく湿った空気の影響で梅雨前線の活動が活発となり、長野県内では18日夕方以降、記録的な豪雨となった。

特に諏訪湖上流域、伊那谷伊北地区の天竜川右岸地域では多量の降雨を記録し、諏訪観測所では2日連続で日雨量が観測史上第2位、第3位となったうえ、24時間雨量では223mm、48時間雨量では317mm、辰野観測所においても24時間雨量246mm、48時間雨量335mmの観測史上最大となる降雨量を記録した。

⑵ 中川村田島地区

豪雨に伴う出水のために、長野県上伊那郡中川村田島地先においては、地元の主要道路となる、県道 北林飯島線の天竜川に架かる天の中川橋 橋台に接する旧堤（低水護岸）部分にも水がつき、一時非常に危険な状態となった。（写真１）

⑶ 被災状況

水位上昇に伴う被災後の調査で、旧堤は豪雨による出水に耐えきれず流出し、保護されていた平場が全て流出し、その下から理兵衛堤防が現れた。（写真２）

写真１　天の中川橋より上流を望む
平成18年7月19日　状況

写真２　被災した旧堤護岸と理兵衛堤防
平成18年7月20日　状況

３．『理兵衛堤防』

⑴ 『理兵衛堤防』とは

理兵衛堤防とは、江戸時代に前沢村（現在の中川村片桐）の大地主であった村松理兵衛忠欣（ただよし）と息子 常邑（つねむら）、孫忠良の親子三代によって膨大な私財を投げ打って成し遂げられた事業である。（写真３）

写真３　理兵衛堤防下流部　明治40年撮影
中川村歴史民族資料館所蔵

⑵ 防災の地元シンボル『理兵衛堤防』

理兵衛堤防造築以後、度重なる洪水によりその大半が埋没してしまいその全貌を見ることはできなくなっていた。しかし、昭和58年の台風による出水により、天の中川橋右岸堤防下流にその姿の一部が出現した。その後、理兵衛堤防は地元の遺産として現地に保存され現在に至っており、小学校の総合学習の時間にも取りあげられ、地域の歴史と共に教えられ、語り継がれてきている。（写真４）

写真４　学習教材にも取りあげられている理兵衛堤防

４．災害工事と理兵衛堤防

⑴ 理兵衛堤防への影響

理兵衛堤防の全貌が現れたことで、その歴史的価値も上がったが、それに伴い豪雨復旧災害復旧工事への影響も明かとなった。つまり、災害工事の掘削に伴い理兵衛堤防の石積み部分の撤去の必要が生じた。しかし、理兵衛堤防は地元の歴史的遺産であり、これらを全面的に撤去をすることは難しい。また、全体を移設することは、移設先をどこにするのか・歴史的価値を損なわず巨石による石積みをどのように移設するのか等の問題があり、実質的には不可能である。そこで、中川村教育委員会との協議の中で、中川村の要望を取り入れ、「理兵衛堤防全体を現地に存置する事とし、石積みの一部はそのまま残し、工事に係る部分については、一旦撤去後、再度現況復旧を行う」ことで合意した。（図１）

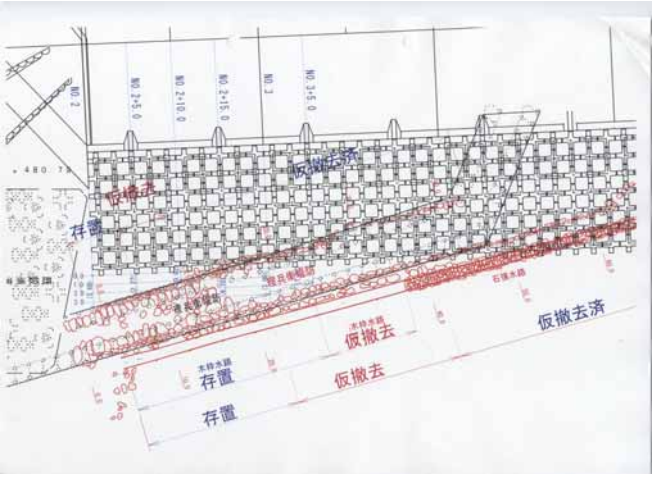

図１　工事影響範囲と理兵衛堤防

５．理兵衛堤防確認調査

⑴ 調査開始

理兵衛堤防が地元の歴史的土木遺産であることから、工事に着手する前に確認調査を行うこととなった。中川村教育委員会と天竜川上流河川事務所が主体となり「中川村遺跡調査会」を立ち上げた。調査は2007年10月15日より始まり、その後堤防周囲を重機により掘削し、堤防の状況をみながら人力作業により慎重に進められ、その全貌を明らかにするべく作業を行った。（写真５）

写真５　人力による掘削作業

⑵ 出現した理兵衛堤防

発掘された理兵衛堤防は、全長180mのうちの約80m。花崗岩による石材にて造築され、堤外側は下流（写真７）ほど原形に近い形と推測される。また、堤防を構成する岩石は、1mを超える大きなものもあり、現代の様な重機が無かった時代に、それらを人力にて構築した先人の偉大さ、苦労が忍ばれる。

写真６　全貌を現した理兵衛堤防

⑶ 石積み

石積み部分は、長さ約80m、高さは約4mで堤防上流部においては石積みの部分が壊れており、根石程度しか残っていない状態であった。石積みは堤外側と堤内側に分けることができ、堤外側の石積みが最初に積まれ、その後堤内側の石積みが積まれ、その後に堤外側の木製用水路及び石積み用水路が造られたと考えられる。堤内側の石積みは、上端の幅が約4m、下端では約5m。

⑷ 灌漑用水路

堤防脇には堤外水路があり、木枠による水路と石積みによる水路が発掘された。用水路は、確認された部分で長さ約71m、石積み水路の部分が約40m、木製水路部分が約31mとなっている。水路の勾配は全体を通してほぼ一定で、100分の0.95となっている。また、用水の取り入れ口の状況が確認でき、明治32年の天竜川実測平面図と合わせて確認すると、他の用水終の排水を再利用していたことまで確認がされた。

写真７　灌漑用の木製水路

６．理兵衛堤防の説明会

⑴ 現地説明会

歴史的遺産についてその様子や調査の状況を地元だけでなく、広く一般の方々に見て頂くために、現地説明会を開いた。説明会は2007年10月21日（参加者数のべ70人）に行われ、それまでの調査で発掘された堤防や灌漑水路について説明が行われ、築堤の歴史や大きさ・構造について解説された。（写真８）

写真８　説明会の様子

⑵ 現場見学者対応

現地説明会として見学会を行った以降も、突然現場を訪れる研究者の方々も後を絶たず、安全装具すらなく現場に入ってしまう方もおられた。また、研究者が訪れる度に現場作業を止めていては、災害復旧工事の工程に影響が出てしまう。そこで、現場内には調査研究範囲と工事範囲を明確に分け、事前に当日の工事内容などの打合せを行い、工事用車両等に十分に注意をして調査を行って頂くように注意喚起を行った。（写真９）

写真９　ヘルメット着用のお願い

⑶ 地元見学者対応

現地見学会以降、新聞にも取りあげられ注目する方が増えたこともあり、地元の見学者が増えてきた。

それに伴い、平行して行っている災害復旧工事の現場に入り込んでしまう方も居られ、重機のそばまで入って

しまわれ、重大事故につながる危険性があり、近くの天の中川橋の脇に展望台を設けて、そこから見学をしていただくようにした。（写真１０）

写真１０　見学用の展望台

⑷ 総合学習

地元の小学校では、4年生の総合学習のなかで地元の歴史を勉強する授業を行っている。その中で理兵衛堤防の歴史も一緒に学習をしているが、今回はその理兵衛堤防が間近にみられるとあって見学の要望があり、実際に現場入って見学を行った。（写真１１）

写真１１　説明を聞く小学生

７．まとめ

⑴ 調査終了・災害復旧工事完成

平成18年7月豪雨により被災した箇所から偶然にもそれまで一部しか存在が知られていなかった歴史的土木遺産が発見され、それ以降災害復旧工事と遺産調査との並行作業という、調査の安全性の問題、施工工程の問題及び作業ヤード的問題等を克服し、史跡調査及び災害復旧工事が完成した。（資料１）

天竜川右岸 天の中川橋上流

「理兵衛堤防」復元が完了

中川村片桐田島の天竜に残る「理兵衛堤防」の一部が、江戸時代に築かれたとみられる石積みの姿がくっきりと復元されたことを、村教育委員会による復元された部分は長さ十二・二メートル、上部の幅四・五メートル。国土交通省が河川法の適用を受けて進め、工事にかかる部分を撤去した後、元の形に戻した。

石積みに沿って出土した石垣の木杭の水色について、一部を現地保存、工事の影響で撤去した部分の木杭は村歴史民俗資料館で保管し、展示公開していく予定。

村の文化財調査審議会が二十六日、現地を視察した。同審議会は「立派な復元がされた」と、理兵衛堤防を史跡として村の文化財に指定するのが適当と指摘。同教育委はこれを受け、指定に向けて関係者の同意を協議していく考え。

復元された理兵衛堤防

資料１　工事完成の新聞報道

長野日報　2008.3.29付　朝刊

一般的に、工事を行いながら歴史遺産の調査を行うことは、多数の困難を伴い非常に難しい場合が多い。今回も、災害復旧工事と理兵衛堤防調査との両立をする事になったわけであるが、地元の方々に、調査遺産に近づいて直接見ていただける機会を設けることができたのは、非常に有効であったと考える。昔の方々の苦労や工夫を垣間見ることができたり、小学生に見学してもらうことで、先人の苦労や地域の歴史について理解を深めてもらうことができた。

このように、歴史的遺産について多くの人々にその歴史的価値を学んでいただくとともに、そのことを語り継いでいくことは、災害の記憶を風化させないためにも重要である。そして、これらが防災教育へとつながって、地元住民の防災意識の向上に大きく貢献できることを願うものである。

謝辞：本論文とりまとめにあたり、協力いただいた中川村歴史民俗資料館学芸員　伊藤修様、中川村教育委員会米山正克様をはじめとする皆様にお礼申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

1) 中川村遺跡調査会：平成19年度　理兵衛堤防確認調査委託報告書
2) 中川村教育委員会:理兵衛堤防現地説明会資料「堤防上流部の全容現る」2007年10月21日配布資料
3) 上伊那郷土研究会：伊那路　第52号　第1号　2008年1月
4) 中川村史編纂刊行委員会:中川村誌　中巻　原始・古代編/中世編/近世編　2006年3月31日発行
5) 天竜川上流工事事務所：語りつぐ天竜川　下平元護著　11. 理兵衛堤防　1988年3月10日発行, 森岡忠一著　21. ものがたり　理兵衛堤防　1990年3月15日発行